世界を変えよう基金報告書

団体名：国際 NGO 団体 Habitat for Humanity 筑波大学支部 LUZ
代表者：理工学群社会工学類 3 年　宮澤菜々子
参加メンバー：同サークル筑波大学学生 15 名
活動内容：ミャンマーにおける住居建築活動及び衛生講習、文化交流
活動期間：2018 年 3 月 9 日~2018 年 3 月 23 日

Habitat for Humanity について

「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現を目指し、世界 70 ヵ国以上で住まいの問題に取り組む国際 NGO。1976 年アメリカのジョージア州アメリカスで発足し、貧困により劣悪な住環境に暮らす家族に非営利で無利子の住宅支援を開始。安心して暮らせる住まいは健全で豊かな生活を営むための基盤だとハビタットは考え、家の建築支援に加え、衛生設備の設置支援や建築技術の普及、災害に強いコミュニティ作りなど、住まいの改善・確保、コミュニティ全体の発展を目指した支援に取り組んでいる。
アジア太平洋地域が抱える住まいの問題に取り組むため、2001 年に日本事務局が設立。

ミャンマーにあるヤンゴン国際空港からバスで三時間ほど行ったところに私たちが今回家を建てる村があった。そこは道路も整備されておらず、砂埃が舞い、息をするのも拒みたくなるようなところだった。気温は 35 度を超え、照りつくような暑さの中現地の大工さんと共に建築作業が開始された。

まず白線の引かれた更地に深さ 30cm ほどの穴を掘った。これは家の土台となりレンガを数段積み、あらかじめ作られていた竹の骨組み(高さ 4m ほど)をそこに入れて立てた後、セメントで固定した。家が高床式なので玄関には階段を作った。階段の土台にはレンガを長方形に 6 段ほど積み、中に砂を入れて最後にセメントを流し込んだ。階段自体は竹で作成した。床には竹の皮を使用した。竹を削って作成した釘を使って骨組みに固定した。この釘は家一軒を完成させるのに約 600 本必要だそうだ。鉈や金槌を多く使用したので注意が必要だった。家の壁にも竹の皮を使用し、うまくずらして編むことで綺麗な模様を作った。この壁は竹釘を使って骨

組みに固定した。屋根は現地の大工さんが付けた。雨を凌ぐため屋根は竹ではなくトタンだった。

家の土台を作る様子(上)

家の土台を作る様子(上)

完成した家の前でホームオーナーと共に（上）

また現地の子供達に衛生講習も行った。歯磨きの仕方や野生動物の危険性、ゴミの捨て方について子供達に伝えた。この村にはゴミを捨てるという文化がなく、そこら中にゴミが転がっていた。

歯磨き講習の様子(上)

休憩時間には村の子供達と交流したり現地の人々とふざけ合ったりもした。突然来た外国人である私たちに、村の人々は温かく接してくれた。ホームオーナーであるおばあちゃんは私たちの体調を気遣い、日傘を差してくれた。高床式の家に登るとき、現地の大工さんが手を差し伸べてくれた。現地の遊びや文化を教えてくれ、一緒に笑いあえた。言葉の通じない村に来た私たちにとってそれはとても嬉しいことだった。

今回このプログラムを通じて全く知らない国だったミャンマーをとても身近に感じることができた。明るく、優しくて向上心があるミャンマーの人々。確かに途上国であり、水や食べ物は衛生的とは言い難い環境にあったが、私たちが今回関わった家族は笑顔が絶えず幸せそうだった。
同じ地球上に生まれながら私たちとこの村の人々の生活はこうも違っていいのだろうか。
たくさんの食べ物を捨てている日本人。娯楽にお金をつぎ込む富裕層。それは同じ人間でありながら許されていいことなのだろうか。たくさんの疑問を持った。この国の向上心溢れる若者たちにより、この国が発展していくのは間違いないだろう。私たち日本人が追い抜かれるのも時間の問題なのではないだろうか。そんなことを考えさせられた。
ミャンマーに実際に来たからこそ知ることが出来た実情、国民性、途上国支援の実態。メンバー同士でのディスカッションを通して知る新たな考え方。大学生のうちにこのような貴重な体験ができたことは私たちのこれからの人生に大きな影響を及ぼすに違いないだろう。

最後に今回このプログラムに参加するにあたり支援してくださった「世界を変えよう基金」鈴木様、並びに関係者の皆様、支援者の皆様に心より御礼申し上げます。